

イギリスにおけるユニバーシティ・テクニカル・カレッジの現状と展望

望 田 研 吾

Present Situation and Future Prospects of University Technical Colleges in England

Kengo Mochida

(2015年11月27日受理)

はじめに

2010年5月に成立したイギリスの保守党・自由民主党連立政権による中等学校改革における中心的政策が、ユニバーシティ・テクニカル・カレッジ (University Technical College, 以下 UTC) の導入である。中等教育段階での技術教育振興を目指す UTC は、UTC を卒業する生徒の「雇用可能性」を大幅に高めるとともに、イギリスで、近い将来に予測される知識基盤経済を支えるテクノロジー分野における深刻な「スキル不足」に対処するための「切り札」的存在として、2015年5月に発足した保守党単独政権においても、その推進が図られている。その方針は、現政権の教育大臣であるニッキー・モーガンによる2014年9月の保守党大会での演説における「新しいユニバーシティ・テクニカル・カレッジやスタジオ・スクールは、若者が価値あるキャリアをつくりあげるのに役立つ専門性を修得するためのかつてないほどのすばらしい機会を彼らに提供している」¹との UTC への讃辞にも表されている。

筆者は、現在、科研「イギリスのユニバーシティ・テクニカル・カレッジに関する比較教育学的研究」²にお

いて、UTC を対象として現地学校調査等に基づき、研究を進めている。この研究の目的は「イギリスの保守党・自由民主党連立政権³による中等学校制度改革の中心に位置する UTC を対象として、UTC 設立の背景と経緯、UTC 設立と運営における大学の関与の実態、UTC の目的と教育実践、UTC に対する教員組合、大学団体等の態度に焦点を当てつつ、UTC の実相を解明することを通じて、中等教育段階の技術教育に対する大学の関与が、イギリスにおいて長く軽視されてきた技術教育の地位向上にとってどのような有効性を持つのか、また、従来のイギリスの中等学校とは異なる特徴を有する UTC が、イギリスの中等学校制度にどのようなインパクトを与えるのか等について、現地調査を中心とする方法によって、比較教育学的視点から明らかにすること」である。筆者は以前、UTC 政策の概要、UTC の主な特質、UTC 導入の背景等について論じたが⁴、本稿では、2014年11月及び2015年3月に行った UTC 等に対する現地調査⁵において実施した校長等へのインタビュー⁶に主として依拠しながら、UTC の教育実践の特質、大学や企業の関与のあり方、UTC が直面している課題、さらに今後の UTC の展望に見ていきたい。

別刷請求先：望田研吾，中村学園大学教育学部，〒814-0198 福岡市城南区別府5-7-1

E-mail: kmochida@nakamura-u.ac.jp

¹ Cited in 'Support for UTCs from Secretary of State for Education', Baker Dearing Educational Trust website (Retrieved 29 August 2015)

² 本研究は JSPS 科研費26381162の助成を受けたものである。

³ 保守党・自由民主党連立政権は、2015年5月に解消され現在は保守党単独政権である。

⁴ 拙稿「イギリスにおけるユニバーシティ・テクニカル・カレッジの展開」(2015)『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』第47号参照。

⁵ 調査期日は2014年11月8日～11月19日と2015年3月16日～3月27日。調査した UTC と調査日は次の通りである。ウィガン UTC (2014年11月10日)、バッキンガムシャー UTC (2014年11月11日)、UTC レディング (2014年11月12日)、ロイヤル・グリニッチ UTC (2014年11月12日)、UTC ランカシャー (2014年11月13日)、UTC プリマス (2014年11月15日)、ダベントリー UTC (2014年11月17日)、UTC ノーフォーク (2015年3月20日) UTC セントラル・ベッドフォードシャー (2015年3月19日)、ヒースロー・アビエーション・エンジニアリング UTC (2015年3月23日) である。インタビューの対象者は副校長等が対象の UTC レディング以外は校長である。なお、UTC ノーフォークについては訪問当日、校長に急用がありインタビューはできなかった。また、UTC の推進団体であるベイカー・デアリング・エデュケーション・トラスト (調査日は2015年3月17日) 及びダベントリー UTC のメイン・スポンサーの一つであるモールトン・カレッジについても訪問調査を実施した。(調査日は2015年3月24日)

⁶ 以下の校長等による回答は、すべて上記調査日における筆者によるインタビューの中でなされたものである。

1. UTC の現状

UTC 導入は、当初は漸進的なかたちで進められた。2010年9月に最初のUTCであるJCBアカデミーが開校したが、2校目のUTCであるブラック・カントリーUTCの開校は2011年9月であり、さらにその1年後の2012年9月にアストン・ユニバーシティ・エンジニアリング・アカデミー、UTC セントラル・ベッドフォードシャー、ハックニーUTCの3校が開校した。その後、2013年9月に12校、2014年9月に13校、2015年9月に13校と、年10校以上のペースで開校が進められており、2015年9月現在、2016年9月開校予定が11校、2017年9月開校予定が8校となっている。⁷その結果、2015年1月現在、UTCで学んでいる生徒数は全部で6,536人となっている。⁸このように順調に発展してきているようにおもわれるUTCであるが、最近になって生じたブラック・カントリーUTCとハックニーUTCの2015年8月での閉校決定は、メディアで大きく報道され⁹、UTCの教育機関としての将来性に対して「危惧」を抱かせることとなった。閉校の直接的原因は、ハックニーUTCの場合は2014年7月時点での志願者が29人（定員は75人）しかなかったことであり、ブラック・カントリーUTCの場合はOfstedによる査察の結果、ほとんどのすべての査察項目において最低の評価である「不適切」と評価されたことであった。さらに、閉校には至らないまでもUTCセントラル・ベッドフォードシャーもOfstedによる査察の結果、「失敗校」と見なされ特別措置下に置かれて改善を強く求められている。こうした事態に、UTCの批判勢力からはUTCのコンセプト自体への批判が再び出されている。¹⁰しかし、この問題に関する下院での討論において、教育副大臣ニック・ボリスは「政府が強くコミットしており、労働党も支持しているUTCプログラムが発展し、また教育的にも財政的にも成功して十分な数の生徒を集め、彼らにすぐれた教育を与えられるように政府は確実に進めていくつもりである。・・・私は、若者への優れた技術教育の機会を提供するすばらしい学校を、断固として作り出すつも

りである」¹¹と述べ、この2校の閉校はあくまで特殊な個別ケースであり、教育省によるUTC推進の方針には変わりはないことを言明した。

2015年8月で閉校となった上記2校とUTC セントラル・ベッドフォードシャーについて、UTC推進を担うベイカー・デアリング・エデュケイショナル・トラスト（Baker Dearing Educational Trust, 以下BDET）チーフ・エグゼクティブのチャールズ・パーカーは、筆者によるインタビューに答えて、その「失敗」の理由について以下のように述べた。

「問題を抱えている3校については、企業、大学とのパートナーシップが十分ではありませんでした。ハックニーUTCの場合は、何をやろうとするのかについての理事会のビジョンが明確ではありませんでした。また同様に、ブラック・カントリーUTCの場合も、企業も大学も（サポートが）強力ではなく、主体となったもう一つの組織も（UTCについて）十分、理解していませんでした。UTC セントラル・ベッドフォードシャーの場合、ロケーション（学校の立地）の重要性について余り明確に認識していませんでした。¹²・・・私たちはハックニーUTCの理事会と交渉しました。もし、理事会が私たちのところに相談に来たら私たちはサポートしたでしょう。しかし、彼らと1年間交渉しましたが、彼らは私やベイカー卿の話を聞こうとしませんでした。彼らとは一緒にやっていけませんでした。それで、継続はできないと考え、政府にノーと言ったのです。」¹³

このようにパーカーは、UTCのコンセプト自体についての両校の認識と理解が不十分であることが両校の「失敗」につながったという見方であった。ただ、パーカーはBDETの側にも当初は準備不足の面があったと反省の弁を述べている。

「私たちの側からすれば、スタートを余りにも急ぎすぎた感があります。私たちは（UTC設立の）機会を与えられ、それを実行することにしました。したがって、私たち（のところに）にやってきた

⁷ Baker Dearing Educational Trust website (Retrieved 29 August 2015)

⁸ Long, R. and Bolton, P. (2015) *University Technical Colleges: Briefing Paper*, Number 07250, 10 July 2015, House of Commons Library, p.3

⁹ 例えば 'Flagship Hackney tech college to close after two years' BBC News (Electronic version) 11 July 2014, 'Flagship University Technical College to close due to falling pupil numbers' *Times Educational Supplement*, 11 July 2014, 'Black Country University College to close' BBC News (Electronic version) 15 April 2015, 'Second UTC to close due to "financial challenges"', *Times Educational Supplement*, 14 April 2015

¹⁰ 例えば、UTCと競合する可能性がある継続教育カレッジ団体は、UTC推進に慎重になるべきだと主張している。[Sedgmore, L. (2015) 'A UTC failure is a setback for vocational education, *FE Week*, 13 July 2015]

¹¹ Long, R. and Bolton, P. (2015) op.cit., p.11

¹² UTC セントラル・ベッドフォードシャーは近隣の主要都市から離れた通学不便な場所に位置している。

¹³ 筆者によるインタビュー（2015年3月17日）

人々に対して、批判的であることが不十分でした。また、私たちにとっては全く未知の部分がありました。(当時 UTC には) JCB アカデミーとアストン・ユニバーシティ・エンジニアリング・アカデミーがあるだけで、参考にするものやエビデンスがありませんでした。私たちは余りにも急ぎすぎしていました。私たちは (UTC の) コンセプトをよく理解していないか、または目的が金であるような人々に対処していたのです。」¹⁴

さらにパーカーは、新たな事業にはリスクはつきもので必ず失敗は生じるが、失敗を隠蔽するのではなく、失敗は認めながらも UTC のブランドを守るためにすばやく失敗を「切り捨てる」ことの方が大事であるとし、今回の措置は、他の UTC に対して「自分たちもしっかりやらなければ閉校になる」との意識を持たせる点で適切なものであったと、強調していた。

以上のように、UTC は 2 校の閉校という「失敗」があったものの学校数は増えていっており、政府や労働党の方針からしても今後も持続的に発展することが予測されるのである。

2. UTC 教育が目指すもの

UTC は技術教育に特化した教育を行う中等学校である。かつてイギリスでは 1944 年教育法以後の中等教育三分岐システムにおける中等学校の 1 タイプとしてテクニカル・スクールが存在した。しかし、テクニカル・スクールはその後の総合制再編成の過程で総合制中等学校へと統合され消滅していった。テクニカル・スクールの目的は「手作業」中心の技術教育によって義務教育終了後、生産現場で働く人材を養成することであった。UTC はその名称によってテクニカル・スクールのイメージを喚起させるが、実際、UTC を批判する教員組合等は、UTC は三分岐システムへの回帰であると主張している。しかし、UTC のコンセプトはエンジニアリングなどのスペシャリズムを軸としながらも、狭いテクニカルな分野に限定されることなくアカデミックな科目の習得も図ることによって、大学進学ルートも可能となるような幅も確保する教育を、その最大の特徴としている。では、校長たち自身は UTC 教育の「エッセンス」についてどのように捉えているのであろうか。

ダベントリー UTC の校長は「UTC ではどのようなスキルを培おうとしているのか」との問いに対して次のように答えた。

「ベーカー卿が言う『インテリジェント・ハンド』

の涵養です。私が生徒に期待するのは、'Why' を理解しそれがどのように応用されるかです。ある面では職業的であるが、全部が職業的ではありません。ハンドを使うだけでなく、何故ハンドを使うのかを理解することです。また、プランする能力、デザインする能力、テクニカルな応用を理解する能力、物事の原因についての科学的な深い理解、違いを比較する力、分析し評価する力、これらはライフスキルであり、生徒のこれからの人生において用いられるものです。デザインするためにマインドを使い、実際につくるためにハンドを用いるのです。本校にはたくさんのマシンがありますが、私たちは機械工を訓練しているのではないのです。企業が望むのは、背後にある原理を理解することです。自動化されたマシンを使うときに、その中でどうなっているのか、何故あなたはそうするのかの理解です。すばらしいデザインをしたとしてもそれを作ることができなければ、それは良いデザインとはいえません。デザインと製造との間にはリンクがあり、生徒はそれを理解する必要があるのです。作ることができないものをデザインすることはできません。本校はレンガ職人、鉛管工、塗装職人を訓練しているではありません。しかし、生徒がプロセスを理解すれば建築技術者、現場監督になったときに、電気工には何が必要なのか、レンガ職人、鉛管工の仕事がどのように難しいかを知れば、彼らはそれぞれの仕事ができるものか理解できます。コンクリートのミキシングにも科学や数学の要素がたくさん含まれています。砂、セメント、水、砂利の割合をどうするのか、割合を違えればどうなるのか、このコンクリートのためにはどの割合が適当なのか、これが『インテリジェント・ハンド』です。『何故、数学で三角法を勉強しなければならないのか』と生徒が尋ねたとき、『試験に出るから』と答えても、生徒の(学習)意欲は湧きません。しかし、『(家を建てる時に)屋根の構造を計算するのに必要』と答えると、生徒は納得します。学習を生活に活用するようにすれば、生徒は理由がわかり、デザインと製造がリンクしていることを知ります。したがって、プロセスを知ることが必要なのです。」

ここに見られる「インテリジェント・ハンド」「マインドとハンド」そして「仕事と生活にリンクした学習」はアカデミックな学習と職業的な学習とのブレンドやミックスを表すキーワードであるが、それは他の UTC の校長によっても共有されている。ヒースロー・アビ

¹⁴ 筆者によるインタビュー (2015 年 3 月 17 日)

エーション・エンジニアリング UTC の校長の回答は以下のものであった。

「私の見解では、近年ではアカデミックな教科が重視されていますが、質の高い職業教育は余り重視されていません。UTC はそれをミックスさせるものだと思います。生徒は、完全にアカデミックな要素から切り離されて、仕事の世界に向けての職業教育を受けるものではありません。私は、生徒を仕事の世界に向けて教育しながら大学進学のお機会もあるという、アカデミックなものと同様のものとの正しいバランスを持つ学校があることは、大変魅力的だと思います。教員組合が同意しようがしまいが、こうした主張は抵抗できないほど強力なものだと思います。」

また、UTC プリマスの校長も理論と実践の融合という点を強調した。

「(本校の教育の) 焦点が GCSE の A* ~ C5 科目 (英語、数学、科学を含む) (の取得) ではないことです。焦点は、生徒を (生徒に合った) コースに進めさせることや、彼らに良い教育をすることによって、彼らが将来『世の中における自分の位置』(すなわちパスウェイ) を理解することです。しかし、彼らも GCSE 5 科目を取得できるのです。それは、アプレンティスシップに進むには必要です。ただ、科目をとるためというのではなく、それは彼らが将来生きていくために必要なものです。私たちは、生徒たちにそのことについて繰り返し言います。『あなたの (人生の) プランは?』『あなたのスキルは?』『人生において何をしたいのか?』などです。もちろん、他の学校もこういったことはやっているでしょう。しかし、イギリスではキャリアアドバイスのセクターはほとんど存在しません。そこで、私たちはそれに強く焦点を当てます。それは個人化されたカリキュラムとして行っています。私たちは仕事の世界やそこで期待されることについてたくさん話し、『自分を誇りに思いなさい』『自分がやったことを誇りに思いなさい』と言っています。本校の教育は、試験で良い成績をとることではなく、学校を卒業したその先を見据えています。それが (他の中等学校との) 大きな違いだと思います。それは、また理論と実践との結合の問題です。生徒は、『何故、王様や女王が何をしたかを学ばなければならないのか』『これを学ぶ利点はいったい何か』を問います。学ばないといけない大事なことがある場合、試験にパスするために学ぶとか、知識のため

の知識の学習ではなく、それを学べば仕事場で仕事をうまくできるようになるし、問題も解決できるという考えを重視しています。」

3. 大学の関与と役割

BDET によると、UTC と他の中等学校との最大の違いは、大学と企業による学校の運営や教育実践に対する「決定的に重要な関与」である。¹⁵では、実際に大学と企業は UTC にどのような関与を行っているのでしょうか。UTC 設立における大学の役割や学校運営に対する大学側の関与についての校長たちの回答は以下のようものであった。

「ノーサンプトン大学とモールトン・カレッジは、本校がスタートしたときメイン・スポンサーとなりました。彼らが資金を獲得し、いくつかの企業パートナーを決定し、資金面での手続きをアシストしてくれました。本校の 2 人のキー・スタッフ (校長と副校長) を採用するためのプロジェクト・チームの構成は、企業代表、ノーサンプトン大学代表、モールトン・カレッジ代表で構成されていました。また、学校の建物やカリキュラムのプロジェクト・チームもできました。モールトン・カレッジは本校の建築に大きく関与し、ノーサンプトン大学も建築とカリキュラムの決定に大きく関わりました。学校の建築が遅れたとき、ノーサンプトン大学は最初の学期に生徒のために施設を提供してくれました。・・・彼らは本校の教育全般や全体的発展についてサポートしてくれています。また、大学のスタッフが理事会のメンバーとなっています。ノーサンプトン大学副学長は、現在、理事会の副会長です。一時は会長でしたが多忙なので副になりました。理事会の何人かのキー・スタッフも大学から派遣されています。彼らはガバナンスを構築したり、理事会の運営を援助してくれています。同様にモールトン・カレッジの校長も非常にサポートしてくれます。一時は彼が理事会副会長でした。モールトン・カレッジのチームは初年度には本校の会計主任をサポートしてくれましたし、他のいろいろなことについてアシストしてくれます。私は、彼らを 2 人のビッグ・ブラザーと考えています。リトル・ブラザーが軌道に乗るまでビッグ・ブラザーが助けてくれているのです。」(ダベントリー UTC)

「プリマス大学の学長がベイカー卿に会って、UTC の可能性について話し始めたのです。ベイ

¹⁵ Baker Dearing Educational Trust (no date) University Technical Colleges, p.6

カー卿が（UTC が）良いアイデアであることを彼女に確信させ、学長が地方当局の役人や他の組織、企業関係者と会って計画を進めることを決定したのです。プロジェクト・マネージャーが採用され、彼が計画を進めていきました。・・・（大学側は）いろいろなことをやってくれています。戦略面では UTC 委員会の委員長はプリマス大学学長補佐で、理事会会長も大学の幹部スタッフです。また、理事の 3 人はプリマス大学から出ています。」（UTC プリマス）

「大学の学長が理事会会長です。もう 1 人の大学からの理事会メンバーが会計監査で会計の専門知識を提供してくれています。彼らはワークショップも提供し、素晴らしい体育館を造ってくれました。本校には残念なことに、屋外施設がないのでスタジオをジムに改築してくれました。彼らは、非常に熱心に私たちをサポートしてくれています。」（バッキンガムシャー UTC）

「彼ら（大学関係者）は例えば、インフラストラクチャーの整備、マーケティング、ICT の配備等で私たちを援助してくれました。理事会会長は私にとってはメンターですが、ベッドフォードカレッジから来ており、戦略面でのアドバイスをしてくれます。（カレッジは）本校の日常的な運営ではなく、本校の基本方針などの戦略的な面でのサポートに関わっています。それは良いバランスだと思います。彼らは私たちに命令するのではなく、前進するためのサポートをしてくれます。」（UTC セントラル・ベッドフォードシャー）

これらの関与に加えて、UTC と大学との間の人的な交流も盛んに行われている。

「私たちは彼ら（レディング大学）と緊密に協働しています。大学のエンジニアリングの実験室への訪問などもやっていますし、他のいろいろな面でも関わっています。・・・大学のスタッフが教えることはまだありませんが、学生がやってきます。本校ではコンピュータサイエンスの教育実習を引き受けているので、学生がやってきます。学生が授業をプランし、デザインするときに、私たちはコンピュータサイエンスのティーチングにおける新しい方法についてサポートします。・・・去年は美術を教えるために学生がボランティアで来てくれました。本校には美術の教師がいらないのです。それは助かりました。・・・去年、私たちは大学に行って大学の教員から講義を受け電子デバイスの開発をしました。私たちが大学に行ったり、大学からゲストが来たりします。また、数学のチャレンジング・デイというの

もあります。・・・私たちは大学と密接に協力しています。今、特定の分野で相互に交流するにはどうすれば良いかを考えています。また、プログラミングについての大学との相互オンラインコースも考えています。」（UTC レディング）

「ノーサンプトン大学は教科専門家を派遣してくれ、スタッフが生徒のメンターとなりいくつかの活動をしています。最近、ノーサンプトン大学の学生自治会会長が学校に来て、生徒の声を代表する生徒会をどのように運営するかについて生徒に話をしてくれました。」（ダベントリー UTC）

「（大学関係者が学校で教えることは）定期的にはありません。私はもっと奨励したいのですが、彼らも自分たちの仕事があるので。しかし、個別のプロジェクトの時には学校に来てくれます。また、スポンサー・イベントの時にもやって来ます。オープン・イーブニングの時のサポートなどもしてくれます。」（UTC ランカシャー）

さらに、UTC プリマスでは実際に大学教員が UTC での授業を担当していた。

「プリマス大学の学生が生徒のメンタリングに來たり、本校の生徒が大学を訪問したりしています。また、プリマス大学の教員が本校に来て、コースの一部を教えています。しかし、まだやるべきことがたくさんあり、まだまだ発展途上です。」

このように UTC の名称に含まれる「ユニバーシティ」という「看板」どおりに、UTC に深く関与している大学側の動機はどのようなものであるのか。大学側の動機についてのロイヤル・グリニッチ UTC 校長の見方の中に、それらが端的に示されている。「大学の動機は何であるのか」という問いに対して同校校長は以下のように回答した。

「いくつかの動機がありますが、一つは、若者を適切なレベルのエンジニアリングと建設業に向かわせることが生じるのを（大学が）熱望していることです。もう一つは、生徒がグリニッチ大学に進学することで、彼らはそれによって利益を得ることができます。大学との関係は相互的なもので、私たちも大学にギブし、大学も私たちにギブするのです。」

このように、中等教育における技術教育への関与を通じて技術教育を振興することや自大学への進学者の確保が、大学側の UTC への関与の強い動機であることが推察される。バッキンガムシャー UTC、ダベントリー UTC、UTC レディング、UTC ランカシャーの校長たちも以下のように同じような見方をしていた。

「大学も学校も、企業が言うように生徒が社会に出たときに彼らが職場への準備ができていないとい

う問題を抱えています。大学は、こうした状況に対して、彼らが違いを作り出すことを示せる機会と考えたのでしょう。企業と一緒に、生徒を高等教育に進学させ、卒業時に仕事の世界にすぐ入っていけるようにすることです。彼らは（学生の）進歩について強い動機を持っています。彼らは上級アプレンティスシップに関わることを望みました。現在は、上級アプレンティスシップが余りありませんから、私たちは彼らと一緒に、それを増やすように努力しています。」（バッキンガムシャー UTC）

「ノーサンプトン大学は2校の UTC のスポンサーとなっています。彼らは生徒のためのパスウェイを作り出すことに非常に熱心です。そのために UTC が果たすべき役割があると考えました。大学は若者の教育を援助するために、若者がいくつかの機会といくつかのパスウェイを持つことを望んだのです。ノーサンプトン大学の卒業生の就職率はわが国で一番高く、学生が何らかの仕事に就く割合がベストです。大学は企業との協働が地域の若者にとって大変良いと考え、UTC がそのための鍵となる存在だと考えたのです。また、彼らはより多くの生徒がノーサンプトン大学に進学することを望みました。」（ダベントリー UTC）

「それ（動機）はエンジニアリングのニーズに対応するような学生の教育に関わっていると思います。レディング大学のアカデミックな面は優秀です。しかし、学生は就職する産業のニーズに適合する必要があると、彼ら（大学側）は考えたのです。多くの企業パートナーがやって来て、大学の卒業生はソフト・スキルを持っていないと言います。卒業生はアカデミック・スキルは優秀かもしれないが、企業で仕事をするためのテクニカルまたはソフト・スキルが弱いので、企業は訓練に多く投資しなければならないのです。本校の生徒は既にソフト・スキルやテクニカル・スキルに加えて、大学に進学できるアカデミックな能力も持っています。独立して仕事をすることができるし、個人で仕事をすることもチームで仕事をすることができるスキルを持っています。」（UTC レディング）

「（大学の動機は）若者がエンジニアリングの学位を取得することを望んだからだと思います。私たちの教育をアシストしたいと思ったからでしょう。彼らは（今までと）違う学校とのリンクというアイデアを支持し、企業と私たちとの間の結びつきを支持したのです。また、彼らは大学の学位を取るために、（従来のような）大学進学準備とは異なる準備をしてきた若者を獲得できたと感じたのです。」

（UTC ランカシャー）

今回の調査の中では、ダベントリー UTC のメイン・スポンサーの一つとして設立に大きな役割を果たした継続教育カレッジであるモールトン・カレッジの校長にもインタビューを行い、UTC への関与を行う側からの見方についてきくことができた。ダベントリー UTC のメイン・スポンサーとなった動機について、校長は以下のように回答した。

「私のカレッジは職業的教育を行う場合の専門性を有しています。その専門性を、ダベントリー地域の中高等教育の水準向上のために役立てることを望んだからです。そのことによって14歳の生徒が、イギリスの教育システムにおける進路について、より広い視野を得ることができるようにしたいと思ったのです。若者に（従来とは異なる）オルタナティブなルートを提供しなかったのです。UTC は大学進学も職業的なアプレンティスシップへの道も可能とするものであり、若者に成功するための（アカデミックなもの）と異なる機会を提供することによって、学校での成績が余り良くなかった若者の学習意欲を高め、その可能性を開花させるのに UTC が適していると思ったからです。」

このインタビューの中で校長が度々用いた言葉は「オルタナティブ」であった。継続教育カレッジと UTC との連携をベースとする相補的關係によって、従来のアカデミックなルートとは異なる「オルタナティブ」な技術教育ルートの確立を目指そうとする校長の意図が強く感じられるものであった。

4. 企業の関与と役割

UTC 教育が涵養を目指す最も重要な資質が「雇用可能性」であることから、企業の果たす役割は特に大きなものであると予想されるが、企業は UTC の教育において実際にどのような役割を果たしているのだろうか。ダベントリー UTC の校長による企業の役割についての以下の回答からは、企業が UTC の教育実践において不可欠の中核的要素となっていることがうかがえる。

「企業がやっていることはチャレンジ・プロジェクトの設定です。技術カリキュラムでは生徒はいくつかの単元を履修しなければなりません。その単元にはプロジェクトがあります。企業がそのプロジェクトを設定します。ポートレックという企業のプロジェクトは発電機の修理についてのプロジェクトです。そのプロジェクトはすべてエンジニアリングとデザインに関連しています。課題は『1 分間に 1500 回転している発電機のドライブ・シャフトが

あり、それを加減装置のプレートにつなげるにはどうすれば良いのか』というものです。プレートは直径20センチから30センチで厚さが4センチあり、高品質の鉄鋼でつくられています。彼らは、生徒に3つのアダプターを与えて、その中でどれを使うことができるかという課題を与えます。生徒はCADを使って、カップリングやドライブシャフトも製図して、使えるかどうかを比較します。『使えない』となれば、『このアダプターを作りかえることができるか』を考えなければなりません。そこで、生徒はデザインをしなければなりません。デザインはエンジニアリングにとって大事なことです。デザインするためには異なる材料を調べないといけません。次に製図を行い、レーザー装置を使って材料を切削します。また、コストのことも考えます。4キロの金属がいるがその費用は？どの程度の利益を上乗せするのか？作業時間のコストについても考えさせます。また、円形の重いディスクをつくりませんが、円形の面積を測らなければいけません。ここで、数学とリンクします。生徒はここで数学を応用しなければいけないのです。こういうのが企業のやり方です。アダプターをデザインして作成するプロジェクトでは、何故その材料を使ったのか、どのような製造技術が必要なのか、どのようなデザインスタンダードを使ったのか（英国スタンダードか欧州スタンダードか）、どのような材料スタンダードを採用したのかなど、たくさんのものが含まれています。こうしたプロジェクトはすべて企業がスポンサーとなっています。『私たちは問題を抱えている。それをどのようにして解決するのか』という課題を与えるのです。」

このように UTC におけるプロジェクトは、企業における仕事の現場でのリアルな状況に即した課題解決をはかることが目的として考えられているようであるが、それは UTC ランカシャーの校長の回答にも示されている。

「私たちは（通常の中高等学校よりも）はるかに強く企業とリンクしています。企業からの人は学校に来て生徒と一緒に活動します。今日の午前中、12学年が活動しているアプレントイスシップがあります。そこでは、週1回のペースで企業の人々がプロジェクトを教えています。また、（彼らは）プロジェクトも設定します。ここは学校であるよりも学習のための仕事場であるという文化です。10学年で入学してきた生徒にとっては、それに慣れるには少し時間がかかります。彼らは、仕事の世界では許されないから、これをしてはいけないとかあれをしてはいけないとか言われた経験がありません。彼ら

がそれに慣れると私たちの目標達成が少し早くなります。より雇用に向くようになるのです。・・・ナショナル・グリッド（電力、ガス会社）という会社があります。彼らは『どのようにガス漏れを発見するのか？ガスメーターを正しく設置する方法は？』といったプロジェクトを実施し、本物のガスメーターやガス管を持ってきて、実際の仕事場での経験を提供してくれます。もう一つのセキュリティ・システム会社は、生徒に『非常に高価なものがある家をどのようにして守るのか』という課題を出して、生徒は24時間、365日、家の中のものを安全に保つセキュリティ・システムを考えなければならないのです。企業の人は生徒の課題への取り組みについて評価を行います。生徒はプロジェクトをエンジョイしますが、私たちはプロジェクトの中で生徒が数学、科学を確実に学ぶようにしています。したがって、生徒が教室で数学を学習するとき、実生活に即したプロジェクトでやったことと関連させます。それは、数学と生活とを結びつけることで、これが、私たちがやろうとしていることです。」

この校長の回答の最後の部分にあるように、UTC におけるプロジェクトでは現場での問題解決能力を培うだけでなく、仕事現場での課題解決と、例えば数学との結びつきの可視化によって、数学学習の必要性を認識させ数学学習への意欲を高めることも目指されている。ダベントリー UTC の校長が述べた「インテリジェント・ハンド」の育成にとって、企業主体で行われるプロジェクトが第一義的な位置を占めていると考えられているのである。

プロジェクトを担当することの他にも、企業は物的な援助も行っている。バッキンガムシャー UTC の校長は、企業からの寛大な物的援助について以下のように述べている。

「本校では（企業がスポンサーとなっていることにより）リソースが本校に与えられるという結果をもたらします。例えば、テイラーウィンピー（建設会社）はミニバスを買ってくれ、建設コースの全生徒に保護ブーツやヘルメットなどの装備を買ってくれました。またホールの足場や照明なども提供してくれました。シスコ（コンピュータ会社）はテクニカルな機器を提供し、エイルズベリー（ソフトウェア）は地理情報システムを作動させるためのソフトを提供してくれました。」

さらに、UTC では教員免許を持たない者でも学校で教えることが認められていることもあり、以下のように企業の人間が UTC のティーチングの一端を担うケースも見られた。

「本校やわが国全体の問題の一つは、特定のエンジニアリング分野における教師のリクルーティングの問題です。本校でもエレクトロニクスの専門家が不足しています。エレクトロニクス企業に勤めている学校理事が、1週間に1時間生徒のために教えることを申し出て、モジュールを教えるようになりました。彼はプラクティカルワークとアセスメントもやっています。通年で週1回来て全単元を教えています。・・・去年はコンピュータ予約システムについて、企業から人が来て教えていました。ゲストティーチャーとしても来て、eコマースについて教えたこともあります。これ以外にも多くの例があります。・・・アップルの関連会社であるファイルメーカーからの人は、ウェブデータベースの学習に関わっています。また、毎週のプロジェクトにも企業からの人が参画しています。それらのプロジェクトでは生徒は、アプリの開発、データベース、エレクトロニクス、鉄道の立体交差のデザインなどに取り組みます。多くの企業からの人々が、いろいろな点で、ティーチングに関わりサポートしています。生徒はeメールやドロップボックスで、(それらの人々から)フィードバックを受けています。」(UTC レディング)

「企業はプロジェクトをサポートし専門家を派遣してくれます。本校の生徒を建設現場に見学に連れて行き、スタッフの訓練もしてくれます。お金はくれませんが、設備や備品は提供してくれます。彼らは非常に熱心で、私たちのコースをサポートしてくれますし、実際に教えることもあります。彼らは非常に熱心なパートナーで、私たちがやろうとしていること、私たちが生徒に提供しようとしていることを、協働で作り上げようとしています。」(ロイヤル・グリニッチ UTC)

「彼らはカリキュラムについてアドバイスをし、プロジェクトについてもアドバイスをします。また、本校の生徒が企業の施設を利用できるようにもなっています。授業で教えることもしています。昨年、プリンセス・ヨット(高級ヨットの製造会社)の1500万ポンドのヨットプロジェクトで、生徒は船体のデザインについて(企業担当者から)週1回学びました。またスピニカ(銀行の貸金庫で使う電子式の保管箱メーカー)という小企業のプロジェクトでは、生徒はそのための検査機器を作成しました。こうしたプロジェクトはUTCの教育の中核にあります。」(UTC プリマス)

こうした企業のUTC教育への関与の動機は、以下に示されるように、大学の場合よりも一層直接的に優秀な

人材の確保という点にあるようである。

「(企業の動機は)人材の確保です。本校は開校2年目ですが、テイラーウィンピーは2人の13年生を受け入れてくれています。彼らはテイラーウィンピーで週3日働き、本校で2日学習します。彼らは報酬を得ています。彼らは将来、現場監督となる予定で、今年度、卒業すると(テイラーウィンピーの)現場監督訓練プログラムに進むようになっています。さらに2人が予定されています。13年生が(実習に)行っている企業のすべてが彼らを将来採用しようと思っています。『買う前に試せ』ということです。仕事経験に行って企業がその生徒を気に入れば、アプレンティスシップを提供する可能性があります。雇用者の動機は、正しい態度とスキルと資格を持つ若者を、より多く獲得することです。(今の若者に)欠けている要素は、正しい態度です。それにはプレゼンテーションができる能力、コミュニケーション能力が含まれます。それが今の若者には欠けていると、企業は考えているのです。」(バッキンガムシャー UTC)

「(企業の動機は)さまざまです。ある企業は企業の社会的責任という観点から関与しています。しかし、すべての企業が生徒を採用することを望んでいます。彼らはスキルを生徒に発達させて、採用することを望んでいます。おそらく、アプレンティスシップまたは上級アプレンティスシップに入れるか、大学進学のスポンサーとなり彼らが自分のところに戻ってくることを望んでいると思います。彼らは生徒にスキルを発達させて、(生徒が)地元にとどまり地元の企業で働くことを望んでいます。」(UTC レディング)

5. UTCが直面する問題

数的には順調に拡大しつつあるUTCであるが、新しく導入された学校であるだけに、それに伴うさまざまな課題に直面することが予測されるが、UTCは現状においてどのような問題を抱えているのだろうか。イギリスのこれまでの中等教育制度においては、初等学校からの中等学校への移行年齢は、通常11歳であり、また義務教育年限終了時におけるシックス・フォームやシックス・フォーム・カレッジ、さらに継続教育カレッジへの16歳での移行も通例である。これらの移行年齢に対して、UTCの入学年齢は14歳である。この14歳という入学年齢によって、UTCの側には生徒のリクルートメントにおける困難性が引き起こされるとともに、近隣の

既存の中等学校の側には UTC へのネガティブな態度な態度が生み出されている状況が見られる。

14歳での生徒のリクルートメントの困難性については、以下のように今回調査した UTC の大半の校長が大きな課題として挙げていた。

「10学年（14歳）でのリクルートメントは大変困難です。他の学校は本校に生徒をやろうとはしません。今年の志願者は4人のみでした。だから、他の学校に行ってもらいました。1学年4人では学校は運営できません。それはたいへん残念でした。だから私たちは16歳以降の教育に焦点を当てています。16歳以降では少しましです。また、近くの学校と提携して、本校でパートタイムのエンジニアリングの授業を行っています。彼らはエンジニアリングを本校で学習し他の科目を自校で学習します。」（セントラル・ベッドフォードシャー UTC）

「（14歳でのリクルートメントは）難しいものです。14歳は、学校が変わる場合の『当り前の年齢』ではありません。親も子どもも14歳での学校の移行を考えていません。本校は、地域的な学校なので広い範囲から生徒をリクルートできますが、ノーサンプトン南部に住む人々は本校が存在することも知りません。人々は（本校には）注目しないのです。また、11歳で中等学校に行き、16歳まで在学し GCSE を取るのがノーマルで、（11歳で入学し）3年後に学校が変わるのはノーマルではないのです。」（ダベントリー UTC）

「シックス・フォームには200人来ましたが、14歳の生徒は37人でした。定員は公式には10年生が150人、シックス・フォームが150人です。シックス・フォームでの入学はよりやさしくなっています。12学年でリクルートする方が10学年より楽です。その理由は10学年という移行のポイントが新しいものだからです。現在は、他にもスタジオ・スクール、フリー・スクールなどがあり、親が移行に際して考慮する新しい学校ができています。通常、中等学校への移行の年は11、12歳です。生徒は普通、11、12歳で初等学校を卒業して中等学校に進学します。新しい移行時期を提示し、それを理解させるには困難があります。・・・これが、私たちの現状です。今は、発展の途中です。来年には定員の半分は埋まっているでしょう。」（ヒースロー・アビエーション・エンジニアリング UTC）

「14歳で生徒をリクルートすることには大変、困難を感じています。14歳で入学するというのは、全く新しいやり方です。誰もが11歳で進学し16歳で進級するということは知っていますが、14歳で

の入学というのは少しショックだったのでしょう。」（UTC プリマス）

「リクルートメントとマーケティングは、仕事の大きな部分を占めています。14歳で生徒を惹きつけるのは大変困難です。シックス・フォームでは、より多くの（リクルートメント）が可能です。地元の学校と良好な関係を持つようにしなければなりません。というのは、私たちが彼らのベストの生徒を『横取り』すると彼らが考えれば、彼らは大変アンハッピーになります。一方、彼らが教えたくないような生徒を私たちに押しつけると、私たちは本校に合っていない生徒を受け入れることになります。それは問題です。この問題は本校だけのものではなく、すべての UTC にとっての 이슈 です。本校が最後のチャンスであるような生徒ではなく、本校に來たがる生徒をいかにして獲得するかが課題です。」（ロイヤル・グリニッチ・UTC）

「学校の定員は埋まっています。私たちは私たちのメッセージを聞きたいと思うすべての人に知らせる機会を得るという点で、制約を受けています。（他の学校が）生徒を失うという話がささやかれています。それは私たちにとってはチャレンジです。この地域にはたくさんの学校があり、私たちは競争に留意しなければなりません。今年度は125人の生徒がいますが、もっと増える必要があります。」（UTC ランカシャー）

「私たちにとっての大きなチャレンジは、本校は（大都市の）マンチェスターとリバプールのちょうど中間にあって、ウィガンまで学校に来る人は余り多くないことです。・・・現在、生徒数は定員500人に対して65人だけです。だから、この1年は私たちにとっての厳しい年でした。今年は、生徒を多くリクルートするために魅力的なマーケティングに力を入れなければいけません。」（ウィガン UTC）

こうした中、UTC レディングは「去年は定員に達しました。今年も、ほぼ定員を満たしています。私たちのリクルーティングは大変良好です。私たちは（リクルーティングに）大変、努力しています。それが奏功しました。」として、リクルートメントは大きな問題ではないということであった。UTC レディングは今年度の Ofsted による学校査察において、UTC として初めて「最優秀」の評価を受けており、優れた教育実践が生徒を惹きつける背景にあったとも考えられる。

14歳での UTC への入学は、近隣の他の中等学校にとっては自分の学校から生徒が「引き抜かれる」ことを意味する。イギリスの学校財政制度においては、学校へ供与される資金は基本的に生徒の数に比例することか

ら、生徒数の減少は直ちに学校予算の減少につながる。このため、新規に地域の教育に「参入」した UTC は他の中等学校にとっては「脅威」として捉えられる傾向にある。こうした競争的環境の中で多くの UTC の校長たちは、近隣の中等学校との関係に悩んでいる様子であった。

他の中等学校校長たちからの非常に強いネガティブな態度に直面した困惑を、UTC プリマスの校長は以下のように述べている。

「彼ら（他の中等学校の校長たち）は本校を憎んでいます。非常に強い言葉ですが、彼らは本校を潰すことを考えています。本校が閉校になるのを望んでいます。非常に極端な状況です。・・・プリマスは、グラマー・スクール、スタジオ・スクール、フリー・スクールがある教育の『混合経済』の地域です。14歳から19歳の年齢の教育において多くの協働が進められ、プリマスは学校間協働の（モデル的）ケースとなっていました。悲しい話ですがそれが崩壊してしまいました。プリマス・ラーニング・トラストという組織があります。それは古い中等学校の校長たちの団体です。月1回会合を開いています。私たちが開校準備を進めていた時、その団体に入会できるか打診したところ『ノー』と言われました。それ以降、彼らは私たちをできる限り妨害しています。UTC は問題生徒を収容する学校であるとか、UTC には資格を持った教師がいない、UTC のコースは誰も望まない、企業も望まないようなものであるなどです。自分で直接志願してきた一人の生徒がいましたが、私たちが入学を進めようとした時、（その生徒の）学校側は、その生徒は害を与えるリスクがある問題生徒であり、学校は単に問題生徒を『処理』しなければならなかったただけだと伝えてきました。」

同様に、陸軍工科部隊司令官の経歴を有し、教育界には「新参者」であるダベントリー UTC の校長も、こうした事態への失望感を次のように表現している。

「他の中等学校は協力的ではありません。ある学校は問題生徒に、本校がその生徒にとって大変合った学校だといって、書類も学校が準備してやり制服も買ってやって『ゴー』と言っています。成績の良い生徒が（UTC の）技術教育コースに変わりたいというと、学校側はその生徒を失うことをおそれて『あの学校は問題生徒を収容する学校だよ』『UTC に行くとうち進学ができなくなる』など、生徒を引き留めるためには何でも言っています。『あそこへ行くとうち勉強ができなくなる』などの嘘も言っています。排除したい生徒はプッシュするがそうでない生

徒の場合は引き留めようとする。この状況は大変悲しいものです。人々が UTC を理解する必要があります。理想的には一人ひとりの生徒にとってベストのことをするために、（本校は）他の学校からのサポートを必要としています。・・・望むことはすべての生徒に本人にとって最も適切な教育が与えられることです。しかし、（学校に供与される）資金が生徒に結びつけられている限り変化しないでしょう。・・・こうした事態は、（校長になる前には）予想していませんでした。愚かにも、他の学校の校長は、その生徒にとって最も適切なことをすると思っていました。そうでないことを知って大変悲しみました。（学校の）資源がかかっているからです。彼らは本校が失敗すると喜ぶでしょう。」

また、UTC ランカシャーの校長も、生徒をめぐる競争の中で、特に UTC に近接した学校が UTC を脅威と見なしていると次のように述べている。

「この学校のすぐ近くの学校は、私がその学校に行って（離学する予定の16歳の）11年生に（UTC についての）話をするのは許すでしょうが、14歳の生徒に対しては話をさせないでしょう。しかし、少し離れたネルソンの学校は誰にでも話をさせることでしょ。だから、態度はさまざまですが、大半の学校は私たちを脅威と感じており、生徒に話をさせようとはしません。」

ただ、スペシャリズムが比較的特殊なために他の中等学校から見ればそれほどの「脅威」とは考えられていない UTC レディング（スペシャリズムはコンピュータ・サイエンス）とヒースロー・アビエーション・エンジニアリング UTC（スペシャリズムは航空エンジニアリング）の場合は、以下のように近隣の中等学校との関係は「敵意」に満ちたものではないようであった。

「校長の中には大変良い人もいます。校長たちは大変歓迎してくれています。私たちは（地域の学校の）コミュニティに加わりたいと思っています。・・・良い校長は自分の学校の生徒が、この UTC に行った方が生徒のためになると考え、UTC に入学させようとするかもしれません。その学校ではコンピュータ・プログラミングの学習機会があまりなければ、UTC を勧めてくれることは本当にありがたいことです。」（UTC レディング）

「（他の中等学校の態度は）ほとんどポジティブです。私はローカルバラーの校長会のメンバーですが、問題となる点は10学年での移行です。他の学校から生徒を『引き抜いて』いるわけですから。しかし、時間がたてばそれは変わるでしょう。私たちのスペシャリズムは多くの生徒に関わるものではあ

りません。私たちが提供する内容に興味を持つ生徒が少数の場合は（校長たちの態度は）それほど（ネガティブ）でもありません。しかし、競争的環境であることには変わりありません。・・・新しいものは何でも抵抗に遭います。他の校長たちとどのようなネットワークを持つのか、どのように地方における教育プロビジョンの中に（UTC が）統合されているのが重要です。」（ヒースロー・アビエーション・エンジニアリング UTC）

以上のように、14歳における他の中等学校からの入学という UTC に特有の要素は、親や生徒の間での14歳での学校移行に対する抵抗感と、UTC を自分の学校から生徒を奪っていく「脅威」と見なす他の中等学校によるネガティブな態度と行動とを生み出し、そのため多くの UTC が低い定員充足率の状況におかれている¹⁶。ただ、BDET のパーカーは低い定員充足率は UTC の理念が浸透し、その教育の有効性への理解が深まれば改善されうるものであると楽観的な見方を示している。¹⁷

6. 技術教育への「偏見」

以上のように、14歳でのリクルートメントの困難性や近隣の中等学校のネガティブな態度という当面の問題を、多くの UTC は抱えている。しかし、それらよりも UTC の発展にとっての、より根本的な障害的要因は、イギリス国民の間に広く存在するといわれるエンジニアリングに対する「時代遅れの」認識や、技術教育をアカデミックな教育に比べて一段と低いものであると見る「偏見」である。イギリスにおけるこうしたエンジニアリングや技術教育への意識に関する問いに対して、校長たちは以下のように回答している。

「偏見は確かにあります。『GCSE に合格しないから UTC に行く』というのは間違っています。（偏見がなくなるには）時間がかかります。人々の考えを一晩で変えることはできません。努力しないといけませんし、結果を示さなければなりません。UTC はまだ余りにも新しいのです。将来的には違いをもたらすと思います。率直に言って5年から10年かかるでしょう。今、UTC は30校あります。5年後には私たちは言うべき何かを持っていることでしょう。それが良いことであることを望みますが。60校、70校の UTC があればそれらが影響を与えるでしょう。」

う。」（バッキンガムシャー UTC）

「UTC がつくられる前、イギリスには長い間技術教育があり、テクニカル・カレッジもありましたが、技術教育はこの国では低く見られてきました。技術教育とアカデミックな教育との分断があります。しかし、わが国の未来は技術教育にかかっています。わが国はエンジニアの養成を十分に行ってきませんでした。十分な数のエンジニアがいないのです。人々は、技術教育は（アカデミックな教育と）違う教育であるが、アカデミックな教育と同じぐらい価値あるものであることに気づき始めています。技術教育がどのようなものであるかの見方が変わりつつあります。ベイカー卿はそれを変えるためのパッションを持っていますし、職業教育に対する見方を変えようとしています。それは違う種類の教育で、格が下のものではないのです。」（UTC セントラル・ベッドフォードシャー）

「一定の科目に対するアカデミックな『紳士気取り』（snobbery）が存在します。それは、前教育大臣マイケル・ゴウブも持っていると思います。彼の焦点は、グラマー・スクールに行ったという彼の経験の方に傾いています。彼はグラマー・スクールに行きましたが、それは彼にとってはうまくいったので、すべての生徒にとってそうあるべきだと考えていますが、そうではないのです。・・・この継続する分断（優秀な生徒はアカデミックな教科を、職業教育はできの良くない生徒向け）というのは、私にとってはフラストレーションのもとです。アカデミックな教科の教師が自分たちの目を少し開いて、両方に価値があると考えれば、彼らは多くを学ぶのに。しかし、職業教育の側にも一部の責任があります。彼らは自分たちがいかに良いかを理解していません。彼らは自分たちが一番下に位置するのを許しているのです。」（UTC プリマス）

「UTC の第一の使命はそれ（技術教育への偏見の打破）だと思います。それ（技術教育に対する偏見）は歴史的なものです。私たちは極めて伝統的なアカデミックな価値を信奉しています。UTC のエトスはそれにチャレンジするものです。ドイツでは、より発達した技術教育があります。私たちがやっていることの一つは、A レベルをもっと技術的な資格とともに提供していることです。本校の生徒

¹⁶ 2014年以前に開校した UTC29校のうち、定員充足率（2014-15年度）が100%の UTC は2校のみであった。筆者が調査した UTC の定員充足率はウィガン UTC(12.2%), UTC セントラル・ベッドフォードシャー (14.1%), UTC ランカシャー (20%), バッキンガムシャー UTC(25%), UTC プリマス (30.7%), ダベントリー UTC(37.5%), UTC レディング (44.5%), ロイヤル・グリニッチ UTC(71%) であった。(Cooney, R. 'Recruitment at 14 "difficult" as UTC's capacity runs as low as 12.2pc' *FE Week*, April 27 2015)

¹⁷ 筆者によるインタビュー（2015年3月17日）

はアカデミックな資格を取れないのではなく、アカデミックな資格も取ることができるのです。アカデミックな資格とテクニカルな資格とのパートナーシップについては、次のようにいうことができます。『この生徒は高い質でアカデミックであると同時に、将来より雇用可能となるためにテクニカルでもある』。(UTC レディング)

「イギリスではエンジニアリングのすばらしい歴史がありながら、エンジニアは車のメカニックのような油にまみれる仕事だと考えられています。問題はエンジニアリングという言葉で人々が抱くイメージです。生徒に航空機産業やそのデザイン現場を見せることによって、そういうイメージを変えることができますと思います。私は、それは本当に重要なことだと思います。そうしたイメージの原因はテレビの影響があるかもしれません。イギリスが昔作っていたような製品を今は作っていないせいであるかもしれません。・・・最大の問題は、エンジニアリングが創造的プロセスだということが十分には伝えられていないことです。エンジニアリングは問題を解決します。それには、創造性、想像力、革新性を必要とします。人々のエンジニアリングへのイメージは、もっと受動的なものでこうしたことを必要としないと考えがちです。」(ヒースロー・アビエーション・エンジニアリング UTC)

「それ(技術教育への偏見)は悲しいことです。それは『紳士気取り』と形容されるものです。伝統的なルートが単に GCSE, A レベルであったに過ぎないのです。子どもがそれほど優秀でなければ技術教育に進む。それは間違いです。イギリスは長い間エンジニアリングにおいてリーダーでした。その後、理由は分かりませんがその地位から滑り落ちました。ドイツでは医者、歯医者、弁護士、エンジニアが同等です。エンジニアは大変重要な専門職と見なされています。イギリスではエンジニアというと、ボイラー服の人や配管工の工具箱を持った人をイメージします。エンジニアはふさわしい評価を与えられていないのです。それには私たち自身も責任があります。・・・長年の間、私たちがエンジニアの価値を低く見てきたせいでもあります。教育も関係しています。非常に優秀な生徒は『油にまみれる』(と見られるような)エンジニアにはなろうとしません。しかし、実際にはエンジニアは幅広い分野に進出しているのです。油にまみれた手をしているわけではないのです。こうしたことは大変悲しいことです。Ofsted が注目しているのは、生徒の進路です。単にフォーマルな資格をどれだけ取得したと

いうことではありません。ある生徒たちは記憶が上手で資格を取得しますが、しかし、彼らは常識に欠け応用力が不足しているかもしれません。(UTC を卒業した生徒の) 進路が知られるようになると人々は技術教育をより現実に見るようになるかもしれません。現在、大幅なスキル不足が存在します。私たちの年代では多くがアプレンティスシップに入りましたが、こうした人々が退職していきます。大きなギャップがあり大規模なスキル不足が生じます。私たちはこの『紳士気取り』を脱けだして、教育界に技術教育をきちんと位置づけねばなりません。」(ダベントリー UTC)

「私の考えでは、エンジニアになるためにはアカデミックでもなければいけません。物理学、数学もやっていなければいけないし、また手も器用でなければいけないのです。他のいろいろなこともやらなければいけません。材料についても知っていなければいけないし、それが実際にうまくいくかどうか、タイム・マネジャー、プロジェクト・マネージャーでもあります。それは膨大な作業で、頭が良くなければいけないのです。私は『余りクレバーでなければエンジニアはどうですか』などを聞くと『何を言っているんだ』という気になります。・・・イギリスは階級社会です。不幸なことに高い地位を持つと見なされる職業は、ものを作ったり建物を建てたりする職業ではありません。しかし、奇妙なことにすばらしい車、ベンツのような車を作るドイツをものすごく称賛しています。イギリス人はドイツのエンジニアがトップに位置するということを知っていますが、階級社会であるために、それをイギリスに持ってくることはできません。オックスフォードやケンブリッジに行ってラテン語、哲学を勉強し、政治家や官僚になることがトップなのです。ビジネスやエンタプライズは、それと同じような高い評価を受けませんでした。その状態は少し変わりつつあります。ビジネスとエンタプライズは今ではトップです。しかし、エンジニアリングや建設については、人々は余り理解していません。(エンジニアの) イメージは、つなぎ服を着て(油で)汚れた男というものです。私はそうした考えが間違っているという論に与したかったから本校に(校長として)来たのです。」(ロイヤル・グリニッチ UTC)

以上の校長たちの回答の中でも指摘されているように、イギリス社会と教育界におけるエンジニアリングや技術教育への「偏見」は、歴史的、社会的なものであり、UTC のみで、また一朝一夕にその打破が進むわけではないことはいままでもない。しかし、校長たち

の言からは、エンジニアリングと技術教育の地位向上に UTC が果たすべき大きな役割に対する「自負と責任」が感じられた。

おわりに

2010年9月に最初の UTC である JCB アカデミーが開校して以来5年が経過し、2017年9月には UTC の数は約60校に達する予定である。学校数の増加は順調にしているようであるが、以上、見てきたように「失敗校」の発生と閉校、低い定員充足率の UTC の存在、近隣中等学校に見られるネガティブな意識等、UTC を取り巻く環境は必ずしもすべて良好なものとは言えない。このような状況にある UTC の今後の展望はどのようなものであろうか。UTC 推進に中心的役割を果たし、UTC の今後の可能性と方向性について最も確に把握しているとおもわれる BDET チーフ・エグゼクティブのチャールズ・パーカーは、これからの UTC について次のようなビジョンを描いている。

「今から10年後にはイギリスの学校教育の中に、真の技術教育が存在していると思います。(技術教育の) システムがあり、UTC は(その中で) 高い質の教育を提供する学校としてそのシステムの中に定着しているでしょう。10年後には UTC は150校に増え、誰もが UTC のことを知り、UTC は誰もが知っているグラマー・スクールのようになるでしょう。(近隣中等学校等の) ネガティブな態度は確かに存在しますが、それは変わると思います。私がすばらしいと思うことは、UTC に来た教師たちが再び他の学校では教えたいと思わないようになっていくことです。既に、UTC 間(のみ)で異動する教師たちもいます。教師が UTC で教えることを愛している。そのことは大変重要なことです。教員組合は UTC に強く反対していますが、私は、それはほとんど気にかけません。私たちは国にとって必要なことをやっているからです。(従来の) イギリスの教育システムは教師中心でしたが UTC は生徒を中心に置いています。UTC ではシステムが中心が生徒たちにあるように組織されていますが、そういう学校を教師たちが好きになることはエキサイティングなことです。」¹⁸

このパーカーの10年後のビジョンは、UTC 推進の責任者としての立場に基づくものであり、当然ポジティブなものとなっている。冒頭に述べたように、UTC はイギリスの「スキル不足」解消にとって不可欠であるとして、保守党、労働党両党、そして産業界からの支持

を得ており、パーカーが言うように UTC の推進は、政治、経済の分野においては国にとって不可欠であるとのコンセンサスはあるようにおもわれる。しかし、肝心の教育界では、すべての教員組合による UTC への反対や、技術教育への教師や親の伝統的な「偏見」が存在すると同時に、社会や国民の間におけるエンジニアリングやエンジニアに対する根強い「時代遅れ」の意識等、UTC の発展を阻害する要因が UTC の前には横たわっている。パーカーが描いた10年後の UTC のビジョンのように、UTC がイギリスの教育界に確固とした地歩を築けるかどうかは、ひとえに UTC の卒業生が企業であれ、大学であれどのような進路(destinations)に向かうのか、また、それらの場でどの程度高い質のパフォーマンスをあげることができるかにかかっているというまでもない。今回の調査でインタビューした校長たちからは、UTC への「逆風」にも関わらず、優れた技術教育の実践を通じて、UTC 卒業生の企業、大学等への進路を切り開き、技術教育とエンジニアリングの地位向上に奮闘努力しようとする強い熱意が感じられたが、その努力がこうした目的の実現に結びつくのか、今後の展開が注目されるところである。

¹⁸ 筆者によるインタビュー(2015年3月17日)